

若年成人と高齢者におけるターン割り当て規則の違い： 重複に対する回復方法の会話分析から

澤田知恭¹, 原田悦子²

Tomoyasu Sawada¹, Etsuko T. Harada²

¹筑波大学大学院, ²筑波大学人間系

¹ Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba,

² Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba

¹sawadatomoyasu@gmail.com

概要

会話中に発話の重複が発生すると、重複した発話の回復が行われる。回復はその対象が自己の発話か、他者の発話かで区別され、またそれぞれが重複による問題が生じたことを認めて表出される有標の回復と、問題が無かったかのようにふるまう無標の回復に区別される。ここでは、若年成人と高齢者とで優先して用いられる回復方法の違いが見られたことに注目して会話分析を行い、その結果、若年成人と高齢者とで適用されるターン割り当てに関する規則の違いが見られたことを報告する。

キーワード：会話分析、話者交替、高齢者

1. 問題と目的

日常的に行われる会話は、話者交替の繰り返しによって特徴づけられる (Holler et al., 2016)。話者交替とは、会話中に発話であるターンのやり取りによって話し手と聞き手が入れ替わる現象で、ターンとターンの間には空白と重複が起こらないか起こったとしても最小限のものである (Sacks et al., 1974)。また、Sacks らはこのような話者交替を実現するためのシステムとして、話者移行適格場 (Transition Relevance Place ; TRP) において次の規則 1, 2, 3 が、話者交替が生じるまで順番に繰り返し適用されるとする。

1. 現話者が次話者を選ぶ
2. 現話者が次話者を選ばなかった場合、会話参加者のうち誰かが次話者として話し出すことができる
3. 他者選択も自己選択も行われなかった場合には現話者が自分のターンを続けて話すことができる

ただし、この話者交替システムでは、一方が話し続けているところに他方が自己選択し話し出すことで発話が重複し、話者交替が失敗する可能性がある (Hayashi, 2013)。発話の重複が発生した場合には、重複によって十分に聴取・理解されなかった可能性のあ

る部分を繰り返すなどする手続きである回復 (Jefferson, 2004; 串田・平本・林, 2017) が行われることがある。Jefferson (2004) はこの回復を、自分の発話を回復させる「自己回復」と、相手の発話の回復させるため、相手に回復を求めたり促したりする「他者回復」に分類した。また、それぞれを重複によって聴取・理解されなかったというトラブルが生じたことを公然と認めて明示的に発話を回復させる「有標の回復」と、問題が生じなかったかのようにふるまう「無標の回復」で区別した。有標の自己回復の代表的な例は、重複した事故の発話の繰り返しである。一方、重複した他者の発話を取り込み、繰り返して発話することは無標の他者回復の代表的な例である。また、無標の他者回復には発話が重複した後に自らが脱落し「うん」、「はい」のようなあいづちを打ち、相手に発話を促すことも含まれる。

これら、有標/無標の自己回復、有標/無標の他者回復の発生について、Jefferson (2004) は用いられる回復方法間で手続きとしての差異を直接には記述していない。しかし、例えば、会話中に発生した問題を解決するという点で、回復と似た手続きである「修復 (Schegloff et al., 1977 西阪訳 2010)」については、その方法間で手続きとしての差異が記述されている。Schegloff et al. (1977) は経験上、言い間違いに対する訂正等の修復が他者より自己によって多く行われることから出発し、会話中の修復の機会において、自己か他者かの選択が存在するのではなく、なによりも自己によるものが優先されることを示した。同時に、ごく稀な他者訂正は大きな制約を受けるものであることを指摘している。

Schegloff et al. (1977) を参考に本研究では、回復方法間での手続きとしての差異を記述することを目的として、発話の重複に際して行われる回復方法に優先関係が見られるか否か検討した。また、高齢者は若年成人と比較して割込み発話を多く行う (大浜, 2006) ことが示されており、重複に対する扱いが異なる可能性

Table 1
回復方法の発生数

	若年成人		高齢者					
	同世代ペア		異世代ペア					
	有標	無標	有標	無標				
自己回復	2	0	16	0	33	1	51	3
他者回復	0	18	1	44	1	66	1	28

から、発話者が若年成人か高齢者かによって回復方法の優先関係が異なるか検討した。

2. データ

本研究の会話分析は、筑波大学学生と筑波大学みんラボ会員（関東地方在住の高齢者）が参加して行われた対象指示コミュニケーション課題（池永，2018）とペアで取り組んだ投資ゲーム課題（澤田，2021）中の会話を対象に行った。いずれの課題も3要因混合計画として実施しており、参加者間要因として参加者の年齢群2水準（若年成人，高齢者）、ペアの種類2水準（同世代ペア，異世代ペア）、参加者内要因として試行の繰り返し（対象指示コミュニケーション課題；6試行，投資ゲーム課題；4ブロック）が設定されていた。異世代ペアは若年成人と高齢者により構成された。ペアは全て同性の初対面どうしで構成され、ペアの種類はランダムに割り当てられた。

参加者

対象指示コミュニケーション課題には若年成人として筑波大学生40名（平均年齢20.62歳±1.47歳）と、高齢者として筑波大学「みんなの使いやすさラボ」のデータベース登録者から高齢者40名（平均年齢72.45±4.72歳）が実験に参加した。また、投資ゲーム課題には若年成人として筑波大学学生36名（男性18名，女性18名，平均年齢20.61±1.10歳）高齢者として筑波大学「みんなの使いやすさラボ」のデータベース登録者から高齢者36名（男性18名，女性18名，平均年齢74.16±4.64歳）が実験に参加した。

高齢者については、年齢70歳以上、MMSE得点が26以上であること、教育歴が12年以上であることを基準として、参加者を募集した。

分析手続き

対象指示コミュニケーション課題，投資ゲーム課題中の会話を全て書き起こし，話者間のターンが移行することを基準に分節化した。発話が重複した区間の内，話し手のターン中に聴き手により発せられたターンを

奪わない短いもの（但馬，2000）をあいづちとして以降の分析から除外した。また，笑い，あるいはTRPであると考えられる相手発話の発話末要素（榎本，2009）と重複している区間を以降の分析から除外した。加えて，投資ゲーム課題中の発話では，顔写真の呈示直後，フィードバック直後に発生した発話の重複も以降の分析から除外した。

回復方法のカウント

Jefferson（2004）を参考に，本研究では重複が生じた際，自らが脱落した後に相手発話の脱落あるいは完了を待ってから，自分の発話を重複した部分を含めて発話した場合を有標の自己回復，自分の発話を重複した部分に続けて発話した無標の自己回復とした。また，重複に際して自らの脱落と相手発話の脱落あるいは完了の有無を問わずに相手に発話の繰り返しを要求した場合を有標の他者回復とした。さらに，自らが脱落し「うん」，「はい」などのあいづちを発話した場合，または続く自己の発話を重複した相手の発話を取り込んで構成した場合を無標の他者回復とした。ここで，有標の回復は，相手に重複とそれに伴う問題が発生したことを伝えるもの，無標の回復は相手に重複に伴う問題が発生しなかったようにふるまうものとして区別される。なお，回復に先立つ重複について，先行話者による発話の中断の有無は問わないものとした。

3. 分析

重複の発生数

まず，重複の発生数はペア辺りの平均で，若年成人同世代ペアが9.0回，高齢者同世代ペアが62.0回，異世代ペアで49.7回（そのうち若年成人により発生したものが14.9回，高齢者により発生したものが34.8回）であった。

回復の発生数

対象指示コミュニケーション課題と投資ゲーム課題中の会話で有標の自己回復，無標の自己回復，有標の他者回復，無標の他者回復を行った回数を，回復を行った参加者の年齢群とペア相手の年齢群毎にTable 1に示した。Table 1より，発話の重複に際して，主に有標の自己回復または無標の他者回復が行われたことが明らかになった。加えて，基本的には無標の他者回復が有標の自己回復に優先されるが，異世代ペアの若年成人，同世代ペアの高齢者では有標の自己回復が行われ

る機会が増加し、さらに異世代ペアの高齢者では有標の自己回復が無標の他者回復に優先されることが示された。

続く会話分析ではなぜ無標の他者回復が優先されるのか、いつ有標の自己回復が行われるかを示した後に、異世代ペアの高齢者で有標の自己回復が優先される理由を明らかにする。

同世代ペアの若年成人

(1) 【片脚の上がってる人】：無標の他者回復

- 1A：はい。6つ目は、人が左側、に、
 2A：向かって立っていて、 []
 3B： [はい] []
 4A：えっと片脚、が上がってる []、図形です []
 5B： [えっと、どっちが？] []
 6A：えっと一ひ、ひだり。 [] ひひ []
 7B： [ああと、] [長方、]
 8B：ちが正方形って、 [] なな []
 9A： [正方形は]、 [→なな、め、]
 10A：んーと右側、にありますね、
 11A：[どちらかという。 [→はい]
 12B：[あ右側、で []
 13B：あ、たぶんこれかな。オッケーで一す

抜粋1は、対象指示コミュニケーション課題の1試行目で無標の他者回復が行われた事例で、以降、Aは指示者、Bは行為者の発話である。抜粋1ではライン9において、Aが自らの起こした重複によって脱落させてしまったBの発話から「斜め」という言葉を取り込んだ発話をする事で無標の他者回復を行っている。指示者としてのAの発話は正方形が右側にあることを伝えるもので、対象指示コミュニケーション課題を遂行する上では「斜め」という発話は必要でない。そのためこの無標の他者回復は課題遂行のためというよりもむしろ相互行為上必要であったと考えられる。この行為者Bの発話にトラブルがなかったことを告げる無標の他者回復は、指示者Aが重複して脱落させてしまったが、本来は行為者Bの発話があったことを示す。また、ライン11ではAはBに重複させられた自らの発話が完了した後に「はい」と発話することで無標の他者回復を行っている。この「はい」による無標の他者回復は重複させられた自身の発話にトラブルが発生しなかったことを告げると同時に、「はい」から続けてBが発話をしていることから、自らのターンが終了し

相手のターンとなったことを告げる役割を持っている。

(2) 【しっかりくっついてるけどずれてるやつ】：有標の自己回復

- 1A：え、えっとー、はじっこでくっついている
 2A：やつではないです。
 3A：くっついているかくっついていないか
 4A：よくわからないやつではなく
 5B：はい（2秒）あ、しっかりくっついてはいるけど=
 6A：そうですちょっと、
 7A：[ひ、 []
 8B：[ちよっ]とずれて[る、上にいく []
 9A： [] [はい。そうです]
 10A：→そうです。
 11B：あ、オッケーです。大丈夫です。

抜粋2は、ライン10においてAによる有標の自己回復が行われている。ライン9で重複させた自身の発話は図形に対する合意形成が終了したことを伝える発話である。この場合、次の図形の指示へと移るには重複させた自身の発話が必要であるために、自身の発話を繰り返し、有標の自己回復が行われたと考えられる。同世代ペアの若年成人で発生した有標の自己回復2件は、いずれも課題遂行上必要なために行われと考えられることから、非常に制限されたものであった。

無標の他者回復が優先される理由について、ターン割り当て規則が関連すると考えられる。若年成人どうしの会話におけるターン割り当て規則は、Sacksらの話者交替システムを言い換えると、「相手のターンが終了した時に自らがターンを取得する機会が割り当てられる」というものである。このターン割り当て規則の下で発話を重複させると、自らによる規則違反の状況が発生し、その解決のために、自身の発話を削除し相手の発話であるターンに問題が生じなかったかのように扱う無標の他者回復が行われると考えられる。

同世代ペアの高齢者：有標の自己回復

(3) 【ふてぶてしい男】

- 1A：4番目はですね。ええ、ふてぶてしい男が、
 2B：はい
 3A：ああ、こう足をちょっと組んでます。
 4A：で、右足をちょっと上げた感じで

- 5 B: はい
 6 A: 左足を下に, し, 下にしています
 7 B: はい
 8 A: で, 足の上に頭がありますね。四角い頭が。
 9 B: 四角い頭。四角い頭は, ダイヤの[形] [ですね?]
 10 A: [ちょ]
 11 A: →ちょっと下に。そうですね。
 12 A: 下をちょっと向いた感じで[ですね。 []
 13 B: [そうですね]
 14 A: 斜め下を向いた感じ=
 15 B: はい

抜粋3は対象指示コミュニケーション課題中の発話で, ライン11においてAがライン10で自ら重複させた発話「ちょ」から始まる発話をする事で有標の自己回復がなされた。ここで注目すべきことは, Aが重複させたライン9ではBによる「四角い頭は, ダイヤの形ですね?」という質問が投げかけられていることである。隣接ペア(Sacks et al., 1974)の考え方に従えばライン9のBの質問が第一部分となり, ライン11では第二部分としてAの返答が期待される。しかし高齢者どうしの会話では, 有標の自己回復が優先して発話され, 隣接ペア第一部分の使用によって他者にターンを割り当てるテクニックが機能していない。高齢者が自ら重複させた発話に対して有標の自己回復を行うことは, 若年成人による有標の自己回復が課題遂行上必要な場合に制限されていたことと対照的であり, 若年成人同士のターン割り当て規則とは異なるターン割り当て規則の存在を示唆する。

(4) 【左に走ってる】: 無標の他者回復

- 1 A: はい。それから3番。
 2 B: はい。
 3 A: 椅子に座って, 右側を向いております。
 4 B: 椅子に座って右側を[向いて, 足が []
 5 A: [はい。それで片足, []
 6 A: 上げております。
 7 B: →片足上げ[, [ええ, したがって,
 8 A: [はい]
 9 B: 顔は少し下を[向いています。 []
 10 A: [その通りです。はい。]

抜粋4は対象指示コミュニケーション課題中の発話で, ライン5でAが重複させたことによりBが脱落し,

Aが重複させた発話をBがライン7で取り入れて発話することで無標の他者回復が行われた。この高齢者どうしの会話に見られる無標の他者回復は, 相手から発話を重複させられ自らが脱落した後に, 相手発話の完了に伴って発生する点で若年成人どうしの会話の無標の他者回復と異なる。「相手のターンが終了した時に自らがターンを取得する機会が割り当てられる」若年成人どうしの会話では, 重複を発生させたことで規則に違反する状況になったため, 早急にターンの所在を示す必要があり, 相手発話完了する前に自らが脱落し無標の他者回復が行われた。それに対して, 高齢者どうしの会話で相手発話完了後に行われる無標の他者回復は, 早急にターンの所在を示す必要がなかったことを示していると考えられるため, その際のターン割り当て規則は, 「話し始めた時点で話し始めた人にターンが割り当てられる」というものであると考えられる。

異世代ペアの若年成人

(5) 【悪い人】: 有標の自己回復

- 1 D: この, あ, さっきの, そうだそう
 2 C: 悪い人でしたよね。悪い人でしたよね。
 3 D: え?この人どうだったのか,
 4 D: 私装いの方に[目が行っちゃって]
 5 C [hh そうですね []
 6 D: あんまりうん, お化粧, [薄いお化粧しててあんまり]
 7 C: [悪い人だった, はい。 []
 8 C: →悪い人でした。
 9 D: 悪い人でした?
 10 C: 悪い人でした。

抜粋5は投資ゲーム課題中の発話で, Cが若年成人, Dが高齢者による発話であり, ライン7では, 若年成人Cが重複を発生させた後, 「はい」と発話することによりまず無標の他者回復を行ったが, 続けてライン8では相手発話の脱落を受け, ライン6で重複させた発話を繰り返す有標の自己回復が行われた。また, 若年成人Cは呈示された顔写真の人物が, 1ブロック目でお金を預けると持ち逃げされてしまう悪い人であったことを伝える経験に基づいた判断をライン2から繰り返し語っている。一方, 高齢者Dは「あんまりうん, お化粧, 薄いお化粧しててあんまり」と顔の印象を元にした判断を語ろうとしている。投資ゲーム課題では顔の印象の良し悪しと実際に行動の良し悪しが直交に操作されている(Suzuki, 2018)ことから, 2ブロッ

ク目以降は顔の印象を直接元にした判断は意味を持たず、1ブロック目の投資結果が必要である。そのため、若年成人 C は有標の自己回復を用いてまで、自らの経験を元にした判断を繰り返すことが課題遂行上必要であったと考えられる。

これらのような有標の自己回復の増加は、高齢者側による割込みの増加（大浜，2006）により自らの発話が中断されることによる，課題遂行上必要となる機会の増加に伴うものであり，若年成人が高齢者と会話する場合に「相手のターンが終了した時に自らがターンを取得する機会が割り当てられる」というターン割り当て規則が原則として変化していないことを示す。

異世代ペアの高齢者：有標の自己回復

(6) 【さっき筑波山って言った】

1A：で，右側の足を上げています。

2A：つま先下向いて [いるんです]けど，

3B： [ああ，はい]

4A：で，走りそうな感じで，[せいほ， [→はい。]

5B： [さっきつく [

6B：→さっき筑波山って言った？

抜粋6では，ライン4で若年成人Aが，高齢者Bからの重複を受けて脱落した後に「はい」と発話することで無標の他者回復を行っている。また，高齢者Bはそれを受けてライン6で「さっき筑波山」と重複した発話を繰り返して有標の自己回復をおこなっている。重複させられた側の若年成人が脱落し，無標の他者回復を行っていることから，高齢者の発話には「話し始めた時点で話し始めた人にターンが割り当てられる」という規則を若年成人側も適用していると考えられる。

4. まとめ

会話分析の結果，若年成人どうしの会話では「相手のターンが終了した時に自らがターンを取得する機会が割り当てられる」規則，高齢者どうしの会話では，「話し始めた時点で話し始めた人にターンが割り当てられる」規則が存在し，それぞれの規則を達成するための手段として，発話の重複に際して無標の他者回復または有標の自己回復が行われることが示された。また，若年成人と高齢者の世代間会話では，若年成人の発話には「ターンは交互に，相手のターンが終了した時に自らに割り当てられる」規則が適用され，高齢者

の発話には「話し始めた時点で話し始めた人にターンが割り当てられる」規則がそれぞれ適用されていることが示された。世代間会話中，この二つの対照的な規則のもとで発話を重複させると若年成人にはターンの取得が認められない一方で，高齢者にはターンの取得が認められる。このような世代間では，若年成人は均等なターンの割り当てを達成するために発話の重複を避ける必要に迫られていることが示唆される。今後は，回復方法の違いから見いだされたターン割り当て規則の違いが，会話過程に及ぼす影響について検討したい。

5. 参考文献

- [1] Holler, J., Kendrick, K. H., Casillas, M., Levinson, S. C., eds. (2016). *Turn-Taking in Human Communicative Interaction*. Lausanne: Frontiers Media.
- [2] Sacks, H., Schegloff, E. A., & Jefferson, G. (1974). A simplest systematics for the organization of turn taking for conversation. *Language*, 50, 696-735.
- [3] Hayashi, M. (2013). Turn allocation and turn sharing. In Sidnell, J., & Stivers, T. (Eds.), *The handbook of conversation analysis* (pp. 167-190). Oxford: Blackwell Publishing.
- [4] Jefferson, G. (2004). A Sketch of some orderly aspects of overlap in natural conversation. In G. Lerner. (Ed.), *Conversation analysis: Studies from the first generation* (pp. 46-59). Philadelphia: Jhon Benjamins.
- [5] 串田 秀也・平本 毅・林 誠 (2017). 会話分析入門. 勁草書房.
- [6] Schegloff, E. A., Jefferson, G., & Sacks, H. (1977). The preference for self-correction in the organization of repair in conversation. *Language*, 53, 361-382.
- [7] 西阪 仰 (2010). 会話分析基本論集 順番交替と修復の組織. 世界思想社.
- [8] 大浜 るい子 (2006). 日本語会話におけるターン交替と相づちに関する研究. 溪水社.
- [9] 池永 将和 (2018). 高齢者-若年者間のコミュニケーションの特異性：共同問題解決場面のマイクロアナリシス (Unpublished master's thesis). 筑波大学大学院人間総合科学研究科, 茨城
- [10] 澤田 知恭・岡部 莉子・中尾 菜々子・鷹阪 龍太・原田 悦子 (2021). 高齢者の信頼性判断の学習を支援するのは同世代か異世代か：対話内容の分析，認知科学会第38回大会発表論文集, 554-559
- [11] 但馬 かおり (2000). 日英語における会話のスタイルとあいづちの関わりについて. 日本女子大学大学院文学研究科紀要, 7, 49-60.
- [12] 榎本美香 (2009). 日本語における聞き手の話者以降適格場の認知メカニズム. ひつじ書房.
- [13] Suzuki, A. (2018). Persistent Reliance on Facial Appearance Among Older Adults When Judging Someone's Trustworthiness. *Journals of Gerontology: Psychological Sciences*, 73, 573-583.